

名簿屋一代 中西利八

——『中国紳士録』と満蒙資料協会について——

金丸裕一

はしがき

本稿はもともと、金丸裕一監修・解説「日中関係史資料叢書」（ゆまに書房より刊行中）の第2号として復刻された、中西利八編『中国紳士録』（満蒙資料協会、1942年）の解題のために執筆され、同書復刻版上巻の冒頭に掲載されたものである（2007年4月出版）。

しかし同書は、現物が図書館・古書店において稀覯本であるとともに、復刻版の定価も税込で5万円を超え、個人としての購入は若干困難であると思われる。ということは即ち、解題そのものに眼を向ける読者の数も、限定的にならざるを得ない結果をもたらす。

また、中西の出版活動についても、解題執筆の段階では今ひとつはつきりしない部分もあり、脱稿後も筆者は、引き続いて調査活動を継続、多少の追加的な知見を得るに到った。したがって本稿では、旧稿に加筆・訂正を加えることにより、中西利八という人物、及び満蒙資料協会という組織の実態をより鮮明に確定するとともに、『中国紳士録』の史料的な位相を呈示したいと考えている。

読者各位、とりわけ従来から中西が編纂した人名録の復刻に関わってきた、日本経済史・日本経営史・「満州国」史関係者からの、厳しいご批判とご助言を期待している。

1. 問題の所在

『中国紳士録』を復刻する過程において、監修者及び「ゆまに書房編集部」は、ふたつのことからの究明に徹底的にこだわりながら、作業を進めていった。はじめにその経緯について、簡単に説明して行きたいと思う。

第一に確認しておくべきは、これまでの研究史における「中西利八」が行った仕事に対する高い評価である。詳細は次章において紹介するが、彼が編纂した「人名録」の類は相当な数にのぼる。そして特にここ10年来、日本経済史・経営史や旧「満洲国」史研究者側による発掘を通じて、その多くが既に「工具書」として復刻されている事実、その一端が窺い知られるだろう。

たとえば、日本経営史を専攻する由井常彦は、次章の表1にみられる『財界人物選集』、及び『第五版 財界人物選集』について、当初は3,000人規模の人名録であったものが、「版を重ねる

ごとに出身・役職のほか、学歴・経歴、さらに所得税はじめ趣味・家族・宗教などが追加項目に加わり、第五版では9,000人以上を収録、「戦前のもっとも基本的な企業家文獻」であると絶賛している¹⁾。同じく、「満洲」史研究において優れた成果を世に問い続ける塚瀬進は、『満洲紳士録』の初版から第四版の掲載人数や異動、さらに記述内容を丹念に読み込んだ上で、各版を比較検討する必要性を説くとともに、その有用性を指摘する²⁾。

しかし第二に、筆者はこうした「解題」に対して、若干の物足りなさを感じている。その疑問はすなわち、中西が作成した名簿に対する評価が、必ずしも十分な説得力や裏づけを持たないという点である。むろん収録人数の多さが、レファレンスとして有用であることは否定できない。だがやはり、「便利」というだけでは、余りに学問性と縁遠い。その主張のためには、塚瀬が実施したような細かい作業が不可欠になるだろう。さらに塚瀬も由井も、「史料作成者」たる中西利八その人については、なら具体的な分析を加えていない。いかなる人物が、どのような目的で編集した史料であったのか？ また、そもそも「満蒙資料協会」とはなにものなのか？ 特に編集者と出版社の究明は、「復刻」の大前提となる「著作権」問題とも密接に関連する重要な事項であるため、我々はきわめて慎重に調査を進めた。

以下、この「解説」においては、(1)「記録者」である中西利八の経歴や背景の分析を前提に、(2)『中国紳士録』という稀有の人名録の位置について、中間報告的な展望を示したいと考えている。復刻版利用者諸賢からのご批判、あるいは情報提供を、心より願う次第である。

2. 中西利八の横顔

筆者と編集部による必死の調査にもかかわらず、『中国紳士録』の編集を行った中西利八について、比較的まとまった情報が掲載されている人名録は、いまのところ3種類を発見したに過ぎない。これを、時系列順に紹介してみよう。

史料 a) 宮地定穎『現今俳家人名辞書』（紫芳社、1909年）360頁。

「翠竹 中西利八」 東京市日本橋区南茅場町三。今井商店員。神田実業学校卒業。別号簾庵、文鳥子。明治廿六年一月卅日生。出生地同市神田区松田町。……

史料 b) 手塚葭村編『明治俳人名鑑一春の巻一』（俳諧書房、1910年）東京2頁。

「翠竹」 松田町十四番地、中西利八、明治二十六年一月生。簾庵、別号傘々子、ほくろ。

史料 c) 谷元二『第十四版 大衆人事録—東京篇—』（帝国秘密探偵社、1942年）700頁。

「中西利八」 満蒙資料協会主幹、麻布区市兵衛町一ノ六、電 赤坂一二一八 [閨歴] 本府松竹長男明治廿六年一月生。夙に角丸商会、日本タイムス、帝国通信、エコノミスト社、ダイヤモンド等歴勤後独立、通俗経済社を創立、著述出版業を営む。著書多数、号未耕。宗教日蓮宗、趣味俳句、観劇、相撲 [家庭] 妻カネ（明二五）本府越後農吉長女、聖保祿高女卒、長男日出男（大正一二）市立一中卒。

表1 「中西利八」が関係した出版物一覧表

| 刊行年月 | 書名 | 編集者 | 住所 | 出版社 | 住所 | 定価 | 註 |
|------------|-----------------|------|------------|--------------------------|------------------|------------|---|
| ① 1923年5月 | 財界フースヒー | 前村信松 | 芝区浜松町1-15 | ジャパパンエノコノミスト社 | 芝区浜松町1-15 | 20円 | 1 |
| ② 1927年12月 | 財界フースヒー | 中西利八 | 麻布区谷町58番地 | 通俗経済社出版部 | 麻布区谷町58番地 | 25円 | |
| ③ 1929年8月 | 大日本現勢史 | 中西利八 | 同上 | 大日本現勢史刊行部 | 同上 | 30円 | 2 |
| ④ 1929年8月 | 財界人物選集 | 中西利八 | 同上 | 財界人物選集刊行会 | 京橋区新湊町2-7 第一印刷所内 | 25円 | |
| ⑤ 1931年5月 | 最新業界人事盛衰録 | 中西利八 | 同上 | 通俗経済社 | 麻布区谷町58番地 | 25円 30円 | 3 |
| ⑥ 1931年5月 | 財界フースヒー 全 | 中西利八 | 同上 | 「財界フースヒー」刊行会 | 同上 | 25円 30円 | |
| ⑦ 1931年6月 | 最新業界人事盛衰録 | 記述なし | 記述なし | (合)商工事情調査会出版部 | 麻布区市兵衛町1-6 | 25円 30円 | 4 |
| ⑧ 1932年11月 | 全日本業界人物大成 乾巻 坤巻 | 中西利八 | 赤坂区榎坂町5番地 | えのき書房内 全日本業界人物大成刊行会 | 赤坂区榎坂町5番地 | 25円 30円 | |
| ⑨ 1932年11月 | 現代名士伝記全集 乾巻 坤巻 | 中西利八 | 同上 | 新報大日本史刊行会 現代名士伝記全集編纂部 | 同上 | 25円 | 2 |
| ⑩ 1934年7月 | 財界二千五百人集 本巻 別巻 | 中西利八 | 芝区神谷町18番地 | 日本産業経済資料社 財界二千五百人集編纂部 | 芝区神谷町18番地 | 30円 | |
| ⑪ 1936年5月 | 新日本人物大系 | 中西利八 | 麻布区市兵衛町1-6 | 東方経済学会出版部 | 麻布区市兵衛町1-6 | 30円 | 5 |
| ⑫ 1937年7月 | 昭和十二年版 満洲紳士録 | 中西利八 | 同上 | 満蒙資料協会 | 同上 | 20円 | |
| ⑬ 1939年6月 | 工業人名大辞典 | 中西利八 | 同上 | 満蒙資料協会出版部 | 同上 | 35円 | 6 |
| ⑭ 1939年6月 | 第五版 財界人物選集 | 中西利八 | 同上 | 財界人物選集刊行会 | 京橋区湊町2-16 第一印刷所内 | 35円 | |
| ⑮ 1940年7月 | 第二版 満洲紳士録 | 中西利八 | 同上 | 満蒙資料協会 | 麻布区市兵衛町1-6 | 30円 | 7 |
| ⑯ 1940年12月 | 第三版 満洲紳士録 | 中西利八 | 同上 | 満蒙資料協会 | 同上 | 30円 | |
| ⑰ 1941年12月 | 満華職員録 | 中西利八 | 同上 | 満蒙資料協会 | 同上 | 9円 | 8 |
| ⑱ 1942年7月 | 中国紳士録 | 中西利八 | 同上 | 満蒙資料協会 | 同上 | 30円 | |
| ⑲ 1943年12月 | 第四版 満洲紳士録 | 中西利八 | 同上 | 満蒙資料協会 | 同上 | 31円6銭 | |

(出典) 各出版物の書誌データより筆者が作成した。

- (註) 1. 表紙では「昭和三年一月刊行」とあるが、奥付を優先した。
 2. これらの本は、「序言」、「凡例」、「本文」、「本文」のみならず、発行日・編集者・印刷所とも基本的に同じであり、発行所の名義のみ異なっている。くわしくは本論文を参照。
 3. 定価の上段は平装、下段は精装。また、「昭和戦前財界人名大辞典」第二巻(大空社、1993年)として、「最新業界人事盛衰録」(商工事情調査会、1931年)が復刻されている。しかし、その此製本を見るに至った」と意味深長な文言が書かれている。ただし、残念なことに、大空社版は表紙・奥付を省略したプリントである故、中西利八と「商工事情調査会」との関係は読み取ることが不可能であった。しかし、龍谷大学図書館(深草)「長尾文庫」に所蔵される現物を閲覧・調査した結果、本文は全て同一であった。
 4. 定価の上段は平装、下段は精装。同書は「財界フースヒー」第三版であるが、奥付に明記された初版①、第二版②の発行日は原本と一致しない。
 5. 別巻は「満蒙及朝鮮篇」であり、数名の社目を半年間現地に出張させた旨が「凡例」に記載されている。
 6. 「新中国紳士録一家強人物ヲ併載ス」が、pp.1505~1858. に附録されている。
 7. 「附編 新中国紳士録一家強人物ヲ併載ス」が、pp.1505~1860. に附録されている。
 8. 第四版からは、「新中国紳士録」は附録されておらず、本文巻ページ数も1355ページに減少している。

史料 a) や史料 b) は、中西が15歳から16歳にかけての時期を記すものである。両書ともに、自薦の俳句数首とともに、個人の雅号や略歴などを書肆に投稿した材料を基礎に編集されているので、掲載料が必要であった可能性が高い。史料 c) に至ると、一足飛びに壮年期50歳前後の記録であると算出できる。そしてこれらを読みつなぐと、1893（明治26）年1月に神田で生まれ、神田実業学校を卒業した後、幾つかの商店を経て、その後は出版業界で生きてきた中西利八の軌跡が、ぼんやりと浮かび上がる。

恐らくは彼の最終学歴であろう「神田実業学校」は、現代の語感から一見すると、高等学校であるような印象を受ける。しかし、神田区内に設立された初等・中等・高等学校に関する史料を網羅的に検討した結果、1900～1910年代においてこれに該当すると推定できる学校は、1901（明治34）年12月に開設が申請された神田区神田関口町神田（尋常高等）小学校附設の「神田商業補習学校」しか拾い上げることができなかった。この学校は、「小学校教育ノ補習ト同時ニ商業ニ要スル智識技能ヲ授クルヲ目的」とした「生徒数一二〇、修業二年」の学校で、「神田区内ニ現住スル商工業家ノ子弟又ハ徒弟ニシテ尋常小学校ヲ卒業シタル」者を対象に、午後4時から午後6時まで授業を行うと規定されていた。³⁾ 同校は、後の1920（大正9）年7月に「神田実業補習学校」と改称するが⁴⁾、史料 a) が出版された時代から、世間ではそう呼ばれていたのかも知れない。

ともあれ推測の域は出ないが、史料 a) と史料 b) が描くような、初等教育を修了し、15歳前後の年齢で既に社会人としての経験を積み、なおかつ趣味としての俳句界にも飛翔しようとしていた、若き日の中西利八というイメージは、当たらずしも遠からずといった所ではないだろうか。余談ながら、中西の長男・日出男が1923（大正12）年に卒業した「市立一中」もまた謎である。同時期の東京府内にかかる校名は存在しておらず、「府立一中」の誤記であると考えられるならば、現・都立日比谷高等学校と読むことができる。また、「第一東京市立中学」と読むのであれば、現・都立九段高校が指定できるものの、その設置年度との間の矛盾は謎のまま残る。いずれにせよ、⁵⁾ 現在は判断を保留しておきたい。

では、史料 b) から史料 c) への「空白」期間の中西は、どのように生きていたのであろう？ 管見の限り、その履歴を解き明かす手がかりとなる文献史料は見あたらない。そこで、彼の生業である出版業界における活動の軌跡を、奥付などを参照しながら整理した結果を表1に示す。ここに列挙したものは、筆者が直接閲覧した図書だけであり、当然この他に未見の成果も存在しているはずである。

表1—①であげた文献は、史料 c) における「エコノミスト社」とおぼしき「ジャパンエコノミスト社」から刊行されており、表1—②と表1—⑥は、奥付によって中西みずからが編集した改訂版であることが一目瞭然だ。1923（大正12）年より、大阪毎日新聞社、後に東京毎日新聞社から『エコノミスト』という雑誌が刊行されている故、はじめ筆者は、これにあやかっただけで社名かと勘ぐったりもした。しかし、国立国会図書館において、武内亥三『株式放資便覧』（ジャパンエコノミスト社、1920年）という本を発見したので、社名を故意に紛らわしい呼称にしたのではないかという「疑惑」は、単なる思いこみに過ぎなかったようだ。中西利八は、この会社から

「暖簾分け」のような形で『財界フースヒー』を継承，その独立は1926（大正15）年であったと記録されるので，時に中西利八33歳，表1—②の出版物が，恐らくは独立後はじめての仕事であったと考えられるのである。

彼の仕事の内容や方法については、「序言」や「凡例」部分を参照しつつ，かつ本文を読みながら復元するより他に術がない。率直な観察結果として，独立初期の中西利八は，かなり胡散臭い仕事，より端的に言えば詐欺に近いような商法にも手を染めていたのではないか。たとえば，表1—③と④，及び表1—⑤と⑥は，同年同月同日に発行されている。各々出版社の名称こそ異なれ奥付の記録は印刷所まで同一であり，また「序言」や「凡例」は一字一句同じ内容，中身も使い回していた。より具体的に指摘するならば，④は③の「人物編」のみを抽出したものであり，⑤と⑥は全文が一字一句すべて同じであった。更に表1—⑦に到ると，編集者の氏名や住所は記さずに，単に「合資会社商工事情調査会出版部」が刊行されたとのみ記されているが，これまた内容は⑤や⑥と全く同一である。これらはつまり，タイトルの相違から別の本であると勘違いして，予約・購入した顧客が存在する可能性を示唆するだろう。

同じ事例は表1—⑧と⑨でも確認され，これら全てに共通している点は，表紙の色と素材とデザインが異なっているという「外観上の相違」にすぎなかった。

しばしば変更する社名，転々とする住所，更に表1—⑦の時点（1931年6月）における「麻布区市兵衛町1—6」という，表1—⑩（1936年5月）以降の編集者・出版社の所在地を予知するが如き突然の出現は，中西利八の商売が，相当危険な内容であったことを暗示するものであろう。

ただし各版の「序文」や「凡例」などで，調査方法については，かなり具体的な手順が素直に披露される。それはすなわち，事前に原稿を作成しこれを掲載予定者に送付，返信による加筆や校正を経て版下とし，回答がないものは督促や出張などで解決を計るといった，きわめて原始的な手法である。

また，出典のタネ明かしをした事例としては，三菱合資資料課からの情報提供（③と④），『人事興信録』・『大衆人事興信録』・『銀行会社要録』・『日本紳士録』などの参照（④と⑤），関東局・日本大使館・満洲国全官庁・満鉄・満鉄傍系会社・商工会議所・商工会・居留民会・新聞社などからの便宜供与（⑫）がある。特に「満洲国」において，本の押売と勘違いして冷淡にあしらう小商店などに比して，「領事館や，民会や，会議所や，商工会や，組合やの例外無しの御理解ある御援助」，さらに「官庁の人や，満鉄の人の朗かさ」によって調査活動に弾みがついたという感慨は（⑫の「序」），あながち大袈裟な独白ではあるまい。なお，各書籍の定価は20円から30円程度に設定されている。高文試験合格のキャリア官僚や大手銀行大卒社員の初任給が70円前後，月給100円がサラリーマン出世の一指標とされた時代であるが故，一定の販売部数があれば，中西はかなり豊かな生活を確保することができたであろう⁷⁾。事実，表1—⑧以降の奥付は，中西の自宅に高額な電話が導入されていることを示すのである。

表2には，近現代日本における「名士録」ともいべき，『日本紳士録』（交詢社）の各版について，中西利八が掲載されているか否かを調査した結果を提示しておいた。収録人名数が約20万人である同書に掲載され始めたのが1937（昭和12）年4月発行の第41版以降であり⁸⁾，これは概ね表1—⑩『新日本人物大系』の刊行から，表1—⑫『昭和十二年版 満洲紳士録』初版発行の時期に該当する。

表2 『日本紳士録』（交詢社）の中の「中西利八」

| 版 | 該当ページ | 記 載 内 容 | 刊行年月 |
|------|-----------|------------------------------------|-----------|
| 第38版 | 東京 p. 565 | 記載なし | 1934年 2 月 |
| 第39版 | 東京 p. 424 | 記載なし | 1935年 2 月 |
| 第40版 | 東京 p. 402 | 記載なし | 1936年 4 月 |
| 第41版 | 東京 p. 432 | 「東方経済学会，麻布，市兵衛1-6，▲赤48-1218」 | 1937年 4 月 |
| 第42版 | 東京 p. 382 | 同 上 | 1938年 4 月 |
| 第43版 | 東京 p. 437 | 「号末耕，満蒙資料協会主幹，麻布，市兵衛1-6，▲赤48-1218」 | 1939年 4 月 |
| 第44版 | 東京 p. 420 | 同 上 | 1940年 5 月 |
| 第45版 | 東京 p. 392 | 同 上 | 1941年 8 月 |
| 第46版 | 東京 p. 336 | 同 上 | 1942年11月 |
| 第47版 | 東京 p. 312 | 同 上 | 1944年 5 月 |
| 第48版 | 「な」 p. 26 | 記載なし | 1954年10月 |

（出典）『日本紳士録』各年版より筆者が作成した。

また、『大衆人事録』（帝国秘密探偵社・国勢協会）の場合、1939（昭和14）年10月発行の第13版では該当箇所（542頁）には中西の名は見当たらず、1942（昭和17）年10月発行の第14版に到り、ようやく先の史料c)でみた記述が出現した。これらは換言すれば、表1—②から表1—⑩の時期においては、その旺盛なる出版活動にもかかわらず社会的には未だ無名であり、43歳前後になってようやく世間から「知られる」存在へと成長したことを意味する。仕事に油が乗る歳頃になったが故ともいえるだろうが、わたくしはむしろ、比較的几帳面な情報収集活動に加え、「東方経済学会」、あるいは「満蒙資料協会」といった、時局便乗の社名を掲げた中西の「軽薄さ」も、成長の一因であるような気がしてならない。中西利八は間違えなく、名簿屋として満洲事変以後のブームに乗り、更に「満洲国」や「大陸」という新市場開拓を契機に「一発当たった」のだろうと、いま筆者は考えている。

名簿屋稼業の一定の熟練と、「帝国日本」による戦争の発動は、中西利八をしてついに世に出る機会を捕捉せしめたのであった。

3. 満蒙資料協会と『中国紳士録』

表1—⑬『中国紳士録』は、中西利八が主幹を務める満蒙資料協会が先に刊行した、⑮『第二版 満洲紳士録』（1940年7月）の附録に起源をもっている。⑬『中国紳士録』の「序文」において、「本協会は曩に『満洲紳士録』の刊行に依り時局の要望に応へ、次で其第三版に於て『新中国紳士録』を附録とし、……今新たに之れが再版として『民国卅一年版中国紳士録』を世に贈る」と明記されているが、この記述は誤りである。

すなわち、表1を参照しながら説明するならば、⑫『昭和十二年版 満洲紳士録』においては、在満日本人が約8,800人収録されており、本文も1552頁に過ぎなかった。これが⑮『第二版 満洲紳士録』に至ると、収録対象がいわゆる「満洲人」、「蒙疆人」、「新中国人」に拡大、本文は1858頁に増加し、このうち1505～1858頁が「新中国紳士録—蒙疆人物ヲ併載ス」に当てられた。

そして⑩『第三版 満州紳士録』においては、本文が1860頁と2頁増加し、「新中国紳士録」は1505～1860頁に収録されている。掲載される人物は約17,700余人、その中で「新中国紳士録」掲載は、日本人（台湾・朝鮮出身を含む）が約2,630人、中国人（蒙疆・満洲出身を含む）が約780人、総計で3,420人余りという概数が得られる。

「新中国紳士録」を受けて本格的な人名録を刊行すべく、再版計画を立て現地調査に半年、全原稿の照会編集に1年2ヶ月、2年近くを要して刊行されたと自己申告する成果が、ここに復刻した⑪『中国紳士録』（1942年7月）である。ここには、「在華日本国吏高等官以上—中国及蒙古政府全官庁官吏薦任官以上」、「在中国日本主要会社並中国主要公司」「在日本対中国関係主要会社」の重役又は主任級以上等の、官民にわたる日中双方の人物に関わるデータが13,000人分以上蒐集・掲載されている。

編纂過程においては、先例と同じく文書による照会と訂正、また現地出張における官庁・会社・団体訪問が採用された。さらに、調査不可能であった場合は、「未調」と明示してあるので、おのずと信頼感が湧いてくる。排列も、『満洲紳士録』各版と同様、全く規則性が無いので、原稿や写真が出揃った順番に版組していたものと思料されるのであった。

国籍別内訳では、日本人（台湾・朝鮮出身者を含む）約8,680人、中国人（蒙疆・満洲出身を含む）約4,450人の総計13,130人余り、この他「異動追補表」に358人の訂正・追加が記されており、「序文」における「広く北中南支官民各層に及び総計一万三千三百余名を収録」との宣伝は、妥当な内容である。収録されるのは日中双方とも、大半が男性であり、女性は数名を数えるに過ぎず、これまた歴史の雰囲気は無言のうちに物語る。表3に見られる通り、戦時中国における日本人人口の目覚しい増加が、『中国紳士録』における情報急増の本質的原因であることは、多言を要すまい。

ともあれ、「新中国紳士録」との比較においては、総収録者数がおよそ3.8倍に増加、とりわけ中国系人名は5.7倍増であり、戦時中国の複雑な人間類型を、個々人の次元にまで掘り下げて検討する際、きわめて具体的かつ詳細な情報を伝える史料といえるだろう。

但し、既に予告的に述べた通り、「満蒙資料協会」という、どことなく権威がありそうな、しかも「組織」的なイメージを与える名称に惑わされてはならない。ふたたび表1にもどり、編集者・出版社と各々の住所を注視してみたい。中西利八が経営した出版社は、②から⑥までの「通俗経済社」、⑦の「商工事情調査会出版部」、⑧の「えのき書房」、⑨の「新釈大日本史刊行会」、⑩の「日本産業経済資料社」、⑪の「東方経済学会出版部」、⑫以降の「満蒙資料協会」と、度々名称を変更した。しかし基本的に出版社の住所と編集者の住所は同じ場所であり、これはつまり、自宅を事業所として兼用していたことの証左でもある。

例外的に、④と⑭の「財界人物選集刊行会」だけが、京橋区の「第一印刷所」内に設置されているが、同書を印刷した会社に名義上の住所を借りていたに過ぎないのだろう。また、⑦「合資会社商工事情調査会出版部」の胡散臭さは、前記の通りである。

さらに「満蒙資料協会」のメンバーについても、⑫『昭和十二年版 満洲紳士録』の「序」において、「心身に応へた冬季の出張調査」や「短時日の難編纂」に、「昼夜兼行、不眠不休の活動を続け」た「協会幹部」として、次の11人の姓名を列挙したデータが得られたのみである。個人の背景などは今のところ全くわからないが、後日の参考になるかも知れぬので、これを記してお

表3 中華民國在留日本人数の動向

(単位:人)

| 区分 | 北支 | | | 中支 | | | 南支 | | | 合計 | | |
|------------|---------|--------|-------|---------|--------|--------|---------|--------|-------|--------|--------|--------|
| | 内地人 | 朝鮮人 | 台湾人 | 内地人 | 朝鮮人 | 台湾人 | 内地人 | 朝鮮人 | 台湾人 | 内地人 | 朝鮮人 | 台湾人 |
| | 計 | 計 | 計 | 計 | 計 | 計 | 計 | 計 | 計 | 計 | 計 | |
| 事変直前 | | | | | | | | | | | | |
| 1937年7月1日 | 34,492 | 8,434 | 182 | 26,097 | 2,634 | 748 | 29,479 | 1,423 | 108 | 12,805 | 14,336 | 13,735 |
| 同年10月1日 | 16,415 | 6,077 | 83 | 4,895 | 330 | 12 | 5,237 | — | — | — | — | 95 |
| 1938年10月1日 | 79,384 | 19,605 | 359 | 32,205 | 2,077 | 665 | 34,947 | 1,455 | 134 | 3,999 | 5,588 | 5,023 |
| 1939年4月1日 | 116,695 | 29,930 | 501 | 49,571 | 3,868 | 896 | 54,335 | 4,990 | 294 | 7,779 | 13,063 | 9,176 |
| 同年7月1日 | 140,846 | 36,242 | 485 | 62,047 | 3,615 | 997 | 66,659 | 6,462 | 347 | 9,282 | 16,091 | 10,764 |
| 同年10月1日 | 139,486 | 37,108 | 351 | 71,209 | 7,243 | 3,044 | 81,496 | 7,341 | 408 | 9,632 | 17,381 | 13,027 |
| 1940年1月1日 | 840,156 | 48,359 | 647 | 82,522 | 8,946 | 3,492 | 94,960 | 9,101 | 527 | 11,983 | 21,611 | 16,122 |
| 同年4月1日 | 207,243 | 61,034 | 734 | 84,585 | 11,180 | 3,525 | 99,290 | 11,327 | 629 | 13,372 | 25,328 | 17,631 |
| 同年7月1日 | 238,760 | 69,853 | 770 | 97,685 | 12,532 | 3,771 | 113,988 | 12,986 | 743 | 15,155 | 28,884 | 19,696 |
| 同年10月1日 | 249,935 | 63,931 | 984 | 102,241 | 13,042 | 3,864 | 119,149 | 12,300 | 684 | 13,478 | 26,472 | 18,326 |
| 1941年1月1日 | 257,208 | 95,184 | 978 | 111,239 | 11,147 | 7,884 | 127,270 | 13,439 | 790 | 14,080 | 28,309 | 19,942 |
| 同年4月1日 | 270,603 | 70,464 | 1,045 | 117,272 | 11,400 | 4,619 | 133,291 | 14,748 | 1,113 | 14,966 | 30,827 | 20,630 |
| 同年7月1日 | 291,809 | 72,054 | 1,139 | 124,847 | 11,655 | 4,680 | 141,182 | 16,081 | 1,166 | 18,670 | 35,920 | 24,489 |
| 同年10月1日 | 301,331 | 73,426 | 1,311 | 129,126 | 13,059 | 4,466 | 145,651 | 16,752 | 1,308 | 19,488 | 37,548 | 25,265 |
| 1942年1月1日 | 308,599 | 72,076 | 1,324 | 130,829 | 11,319 | 4,777 | 146,925 | 17,047 | 1,490 | 21,427 | 39,964 | 27,228 |
| 同年4月1日 | 317,407 | 70,571 | 1,196 | 134,762 | 10,828 | 5,172 | 150,762 | 17,234 | 1,293 | 21,452 | 39,979 | 27,820 |
| 同年7月1日 | 330,771 | 73,859 | 1,215 | 140,435 | 11,081 | 4,636 | 156,152 | 17,677 | 1,213 | 20,103 | 38,993 | 25,954 |
| 同年10月1日 | 334,833 | 71,755 | 1,536 | 141,387 | 11,055 | 5,501 | 157,943 | 18,568 | 1,022 | 19,777 | 39,367 | 26,814 |
| 1943年1月1日 | 330,183 | 74,029 | 1,261 | 142,271 | 11,526 | 5,851 | 159,648 | 18,682 | 1,099 | 19,819 | 39,600 | 26,931 |
| 同年4月1日 | 353,695 | 71,022 | 1,334 | 147,934 | 12,340 | 6,529 | 166,803 | 18,705 | 1,257 | 20,525 | 40,487 | 28,408 |
| 同年7月1日 | 340,492 | 66,138 | 1,442 | 164,598 | 17,324 | 7,045 | 188,967 | 18,687 | 1,843 | 22,935 | 43,465 | 31,422 |
| 同年10月1日 | 352,678 | 65,808 | 1,662 | 167,646 | 18,145 | 7,282 | 193,073 | 13,086 | 1,568 | 21,710 | 41,364 | 30,654 |
| 1944年1月1日 | 355,252 | 65,058 | 1,486 | 164,802 | 18,311 | 10,241 | 193,354 | 18,108 | 1,691 | 22,415 | 42,214 | 34,142 |
| 同年4月1日 | 332,457 | 57,268 | 1,472 | 164,215 | 18,372 | 7,276 | 189,863 | 18,444 | 1,993 | 21,275 | 41,712 | 30,023 |
| 同年7月1日 | 325,492 | 53,935 | 1,464 | 161,945 | 17,906 | 7,101 | 186,952 | 18,655 | 1,709 | 21,559 | 41,923 | 30,124 |

(出典) 『中華民國在留本邦人及第三國人口概計表』昭和十九年第三報(大東亜省総務局経済課, 1945年3月) 1頁。

く。飯田常雄・黒田三枝・坂齋雅美・鈴木政男・富塚知恥男・中西元治・中村一郎・濱田藤吉・林冬雄・保科久治・三角俊一郎。ここからもまた「満蒙資料協会」とは、個人経営あるいは小経営出版社の域を脱しない会社であったと推測されるのである。

ではどうして、一介の東京在住の出版人が、かくも龐大な『中国紳士録』を編纂し得たのか？最後にこの問題を簡単に検討したい。

既に述べた通り、独立した当初は「危ない」仕事も進めた感がある中西利八であるが、名簿屋にとっての生命ともいい得る個人情報次第に蓄積し、また作業のノウハウも身につけた頃、新天地「満洲国」が誕生した。かかる時流に着目した彼は、実は⑮『第二版 満洲紳士録』に「新中国紳士録」を附録させる以前から、着々と中国関係の人物情報の収集を開始していた。

⑩『財界二千五百人集』別巻の「満蒙朝鮮篇」、⑪『新日本人物大系』下巻における「在支人物篇」が、その嚆矢といえるだろう。そして⑫『昭和十二年版 満洲紳士録』以降の「大陸進出」過程（⑫・⑮・⑯）において、中国在住人物のデータを本格的に蒐集・整理し「新中国紳士録」として中間的にまとめ、さらに⑰『満華職員録』と⑱『中国紳士録』編纂作業を通じて、いわゆる「日満支」官庁・団体・会社とのコネを強化して行き、ついに「大陸三部作」の刊行に至ったのである。

かかる仮説が妥当だとするならば、『中国紳士録』には、中西利八の7年に及ぶ助走の成果がたしかに集約されているのであった。

4. 結語——敗戦前後における「失踪」の謎——

中西が編集した人名録に共通する個性として、掲載者の写真を多く収録する点も指摘しておきたい。現在われわれは、モノクロ写真を通じて往事に活躍した人々について、単なる「姓名」としてのみならず、その風貌や表情をも連想しながら、人物調査に従事することが可能となっている。

しかしこれとは対照的に、編集者の中西利八自身は、みずからの記録をほとんど残していない。その表情はおろか、経歴まで謎が多い。前章までのアプローチとて、所詮は断片的史料や奥付などからの傍証作業であり、わたくしの思い込みや誤解が介入している部分も多いだろう。

いずれにせよ、現在までのところ、中西が関与した確固たる痕跡は、表1—⑲『第四版 満洲紳士録』（1943年12月）の奥付、及び表2の『日本紳士録』第47版（1944年5月）における簡単な記載をもって途絶える。

参考までに、彼の情報が「発見できなかった」史料を、以下に紹介しよう。

- (あ) 『第十五版 人事興信録』下（株式会社人事興信所、1948年9月）「ナ」16頁。
- (い) 高田巖編『日本紳士録 東京篇』（ジャパン・クレジット・ビューロー、1949年2月）297頁。
- (う) 『文化人名録（昭和二十六年版）—著作権権利者及び著作権使用者の名簿』（社団法人日本著作権協議会、1951年3月）、「本文」及び「第七部 著作権権利者一覧」の部分とも。
- (え) 『第四十八版 日本紳士録』（交詢社、1954年10月）「な」26頁。

(お) 国立国会図書館図書部編『国立国会図書館著者名典拠録—明治以降日本人名』第2版（紀伊國屋書店，1991年9月）4812～4813頁。

戦中・敗戦後の混乱下という一言で片づく問題かも知れないが、(う)の「著作権台帳」、あるいは(え)の「交詢社版紳士録」の戦後初版、また(お)「国会図書館典拠録」の全てにおいて所在が確認できない原因はどこにあるのか？「解説」を終わるにあたり、若干この問題を推理してみたいと思う。

中西利八の足跡が最後に確認できるのは1944（昭和19）年5月、彼が満51歳の春である。

この年の7月にサイパン島が陥落、これを契機に本土の戦局、銃後の日常も大きく変化した。首都東京では、同年11月24日の空襲以降、各地に連日の如く爆弾・焼夷弾が降り注いだ。「満蒙資料協会」の所在地たる麻布区市兵衛町の御屋敷街とて例外ではなく、1945（昭和20）年3月9日の夜間大空襲、また4月15日から16日の爆撃で焼失し、さらに5月25日深夜の追い討ち空襲で、麻布区管内の残存市街はほぼ焼失たと記録される。市兵衛町に限定した数値は確認できないが、麻布区全体では戦前戸数19,611戸が、1945年5月27日にはなんと1,760戸にまで激減していたという。また人的被害も、麻布区の死者180名、重傷者197名、軽傷者1,306名、罹災者の総計は44,584名に達した。これは同区の戦前人口87,957人の半数が、なんらかの被害を受けた事を示す数値である。⁹⁾

中西利八が、戦争末期にどのような運命に遭遇したか、まったくわからない。だが仮に、本人は平然と無傷であったとしても、彼が拠点としていた市兵衛町は壊滅的な状況にあり、戦前期は8割余りが借家住まいという一般論を敷衍するならば、焼け出された可能性は非常に大きいだろう。51歳という、壮年期働き盛りの記録を最後に、その行方をくらませた彼を追いかける作業は、このあたりでそろそろ限界に達した。

本年（2007年）3月、彼の足跡を求めて、わたくしは六本木付近を、古い地図を片手にあてどもなく歩いた。ヒントはなにも見つからない。かつて市兵衛町と呼ばれたスペイン大使館付近は、少なくとも筆者の私生活とは、全く無縁のお洒落な町並みとなり、日没近い時間になると、どこを歩いていても、六本木ヒルズの無機質な巨大照明が、視界に飛び込んでくる。

眼前のイルミネーションとは対照的に、70年を超えた歳月は、彼を闇の中へと追いやった。中西利八は何処へ行ってしまったのだろうか？

我が影の 細うなりゆく 夜寒かな（翠竹・中西利八¹⁰⁾）

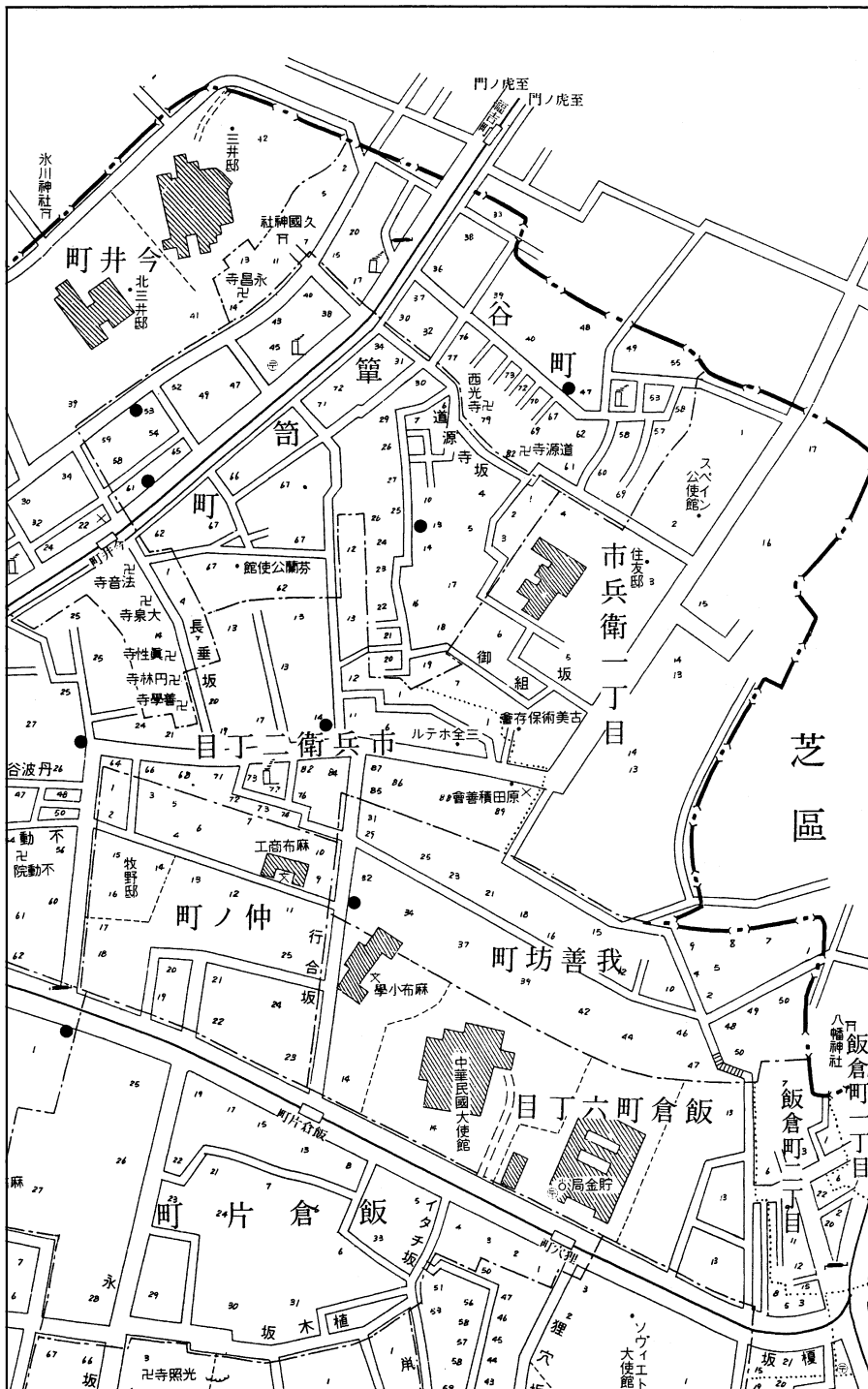
[附記] 本稿の作成にあたり、東京都立中央図書館・財団法人東洋文庫・同志社大学図書館（今出川）・龍谷大学図書館（深草）・立命館大学図書館にはたいへんお世話になった。特に記して感謝を申し上げたい。また、本文中でも明らかな通り、『中国紳士録』復刻に際する著作権の確認は、曖昧なまままで終わってしまった。これまでも中西が刊行した図書の復刻は数多く出版されているが、従来の復刊過程において著作権確認がなされていないという厳しい現実に対して、筆者は喫驚した次

第である。「便利」だから使おうという発想だけが優先され、史料批判が疎かにされてきた一つの結果だと考える。本稿を目にした中西利八のご親族・関係者、あるいはなんらかの情報をお持ちの方は、ゆまに書房編集部、あるいは筆者までご一報いただければ幸甚である。

註

- 1) 由井常彦「『企業家編』総合解題」（芳賀登など編『日本人物情報大系』第31巻，皓星社，2000年）557頁。
- 2) 塚瀬進「『満洲編』総合解題」（芳賀登など編『日本人物情報大系』第11巻，皓星社，1999年）702～704頁。なお、塚瀬は第三版の収録人数が約18,000人であったものが、「時局がら、第四版では約16,000人と減少し、数の上では第三版の優位が際立つ」と評価している。これは「時局」の問題というよりは、単に第四版以降「新中国紳士録」という附録が削除されたためかと思われる。とすれば、第三版よりはむしろ第四版の方が、より「満洲」に密着した人名録といえるのではないか。
- 3) 『東京教育史資料大系』第8巻（東京都立教育研究所，1974年）557～558頁。
- 4) 『東京教育史資料大系』第10巻，508頁。
- 5) 東京における旧制中学校については、さしあたり岡田孝一『東京府立中学』（同成社，2004年）も参照した。
- 6) 『帝国信用録 第参拾貳版』（帝国興信所，1939年）東京府279頁。なおこの年の調査によれば、対物信用と年商・年収が未詳，対人信用は普通で，盛衰は常態とされている。
- 7) 岩瀬彰「『月給百円』サラリーマン」（講談社，2006年），また週刊朝日編『値段史年表』（朝日新聞社，1988年）などを参照。ちなみに，1942（昭和12）年の日本本土（内地）の総人口はおおよそ7,290万人，中国在留日本人は60万人程度である。『日本紳士録』の掲載人数が約20万人，『中国紳士録』に掲載される日本人が約8,680人ということは，前者の場合は概ね365人に1人，これが後者では70人に1人が掲載という単純な割り算が成立する。この「掲載率」の高さが「購入者数」を上方にシフトさせ，中西の「紳士録商法」を軌道に乗らしめた大きな要因ではないだろうか。
- 8) この時期の『日本紳士録』が20万人余りの人物を収録した原因は，ひとえにその記載の単純さに求められる。大半の事例において氏名・職業・住所・電話程度の情報が記されるのみである故，たとえば最新の『日本紳士録』第80版（交詢社出版部，2007年）の収録人数約10万人との落差が大きいのである。
- 9) 『港区史』下巻（東京都港区役所，1960年）854～864頁。また，「港区 太平洋戦争中の空襲による焼失及び建物疎開区域図」（港区戦争・戦災体験集編集委員会編『平和の願いを込めて—今語りつく戦争の体験』港区企画部文化・国際交流担当，1991年）を参照。
- 10) 手塚農村編『明治俳人名鑑—春の巻』（俳諧書房，1910年）東京2頁。

地図 満蒙資料協会の所在地（1941年）



(出典) 『東京港区近代沿革図—麻布・六本木—』(港区立三田図書館, 1977年) 43頁。
 (解説) 地図右上の部分に、表1—②~⑥における麻布区谷町58、表1—⑪~⑱の市兵衛町1-16が確認できる。前者は現在のスペイン大使館西側、後者は地下鉄南北線六本木一丁目駅前の泉ガーデンタワー東側に該当する。なお、表1—⑧~⑨における赤坂区榎坂町は谷町の北隣、現アメリカ大使館西側、表1—⑩芝区神谷町は市兵衛町の西隣、現テレビ東京付近であり、「名簿屋」としての中西利八は、この地図の周辺を拠点として活動していた。

对满蒙资料协会和中西利八的简单分析

金丸裕一

《中国绅士录》（满蒙资料协会，1942年）是由中西利八编撰的一本收录人数逾1万3千名的花名册，本稿就中西利八的人物背景及该书的发行主体——“满蒙资料协会”进行分析。

迄今为止，中西编辑并发行的5、6种花名册主要经日本经营史研究人员及满洲研究人员等翻印后，一直作为该研究领域的有益资料得以应用。

然而，较之对这类资料的贡献的评价，中西利八其人本身的经历及对他所参与的调查，出版活动的分析却几乎是一片空白。

其最大的理由在于有关他的记录几乎为零。为了弥补这个空白，笔者就他编辑的多种花名册的实物进行了比较分析后，得到新的发现如下：

1，其初期工作的大部分都是把同一内容的花名册仅仅改个名称出版，换汤不换药，甚至含有诈骗性质。

2，对于中西利八的这种生意来说，打入满洲，中国新市场和制作新领域的花名册成为营业转折点。

3，尽管主编中西利八推行的生意经存在不可靠的一面，然而，《满洲绅士录》，《中国绅士录》等书囊括了大部分同时期旅居满洲，中国的日本人及对日友好的中国人，从这一点来讲，可以判断为有益资料。

本稿的研究工作相当于史料批评最基础的部分，今后如有研究人员使用中西利八编撰的花名册，则必须参照本文。

A Brief Analysis of the Manchuria-Mongolia Materials Association and Nakanishi Rihachi

Yuichi Isaac KANEMARU

Abstract

This paper will analyze the background of Nakanishi Rihachi, an individual who edited *Chugoku Shinshiroku* (A Who is Who of Gentlemen in China), a biographical study that lists more than 13,000 names published by the Manmo Shiryo Kyokai (the Manchuria-Mongolia Materials Association) in 1942, together with the publishing agent, the Association.

To date, the five or six volumes of Who is Who edited and published by Nakanishi have been reprinted by researchers in fields such as Japanese management history and Manchurian studies. These provide researchers with a useful resource that continues to be used today.

However, while the usefulness of these historical materials has been acknowledged frequently, almost no work has been done on the background of Nakanishi. Nor has any analysis been published on the surveys and publishing activities he was involved in.

The major reason for this is that there is almost no documentation of Nakanishi. In order to fill in this blank in the literature, the author made a comparison with the original copies of the various Who is Who Nakanishi edited, and made the following discoveries.

1. Much of his earlier work consisted of publishing books where the title alone was changed. This earlier work includes fraudulent elements.

2. For Nakanishi's commercial activities, moving into the "new market" that was Manchuria and China and the creation of lists of people in new areas was a turning point in his business.

3. Despite these darker aspects of his commercial activities, the *Manshu Shinshiroku* (A Who is Who of Manchurian Gentlemen) and *Chugoku Shinshiroku* (A Who is Who of Gentlemen in China) are a useful resource because they cover extensively so many of the Japanese and the pro-Japanese Chinese in Manchuria and China.

This paper consists of the most basic element of criticizing historical materials. The author believes it will be essential for any researcher in the future who uses a Who is Who edited by Nakanishi Rihachi.